

大阪府立大学創基 130 年記念事業
日本地質学会第119年学術大会 市民講演会

地震・津波・地盤災害 ～知ること、伝えること～

日時： 2012年9月16日(日) 14:30～17:00 (開場 13:30) 【入場無料】

会場： 大阪府立大学中百舌鳥キャンパス Uホール白鷺

主催： 一般社団法人日本地質学会・公立大学法人大阪府立大学

「将来の地震津波災害にどう備えるか ～過去の巨大地震大津波からの教訓～」

金田義行氏(海洋研究開発機構 技術研究統括 地震津波・防災研究プロジェクトリーダー)

2011年3月11日の東日本大震災は、近代日本の最大級の海溝型巨大地震・大津波災害でした。M9 巨大地震に伴う大津波の襲来により引き起こされた甚大な広域な地震津波被害。この東日本大震災の教訓をどのように活かすか？ 特に再来が危惧されている南海トラフ巨大地震大津波への備えは、今後の地震津波減災課題の喫緊の課題です。内閣府の南海トラフ巨大地震津波の新想定が公表され社会的な関心を集めており、各自治体においてはその対策がいろいろな観点で検討されています。本講演では、南海トラフ巨大地震津波研究と対策における「温故知新」と「居安思危 思則有備」の現状と展望を紹介します。

「内陸地震はどうして起こるのか？」

飯尾能久氏(京都大学防災研究所地震予知研究センター長 教授)

ある内陸の断層において大地震が起こる頻度は数百年から数万年に1回程度です。めったに起こりませんが、もし発生すると、阪神・淡路大震災のような被害を及ぼす恐れがあります。近畿地方には多くの活断層があり、上町断層帯など大地震の発生確率が他に比べて高いものがいくつか存在します。しかし、現在の予測の精度は、明日にも大地震が起こるかも知れないが、千年くらい先かもしれないという程度です。予測の精度を上げるためには、内陸地震がなぜ起こるかを明らかにすることが重要です。断層直下の柔らかい領域の変形により直上の断層がひずむことが、内陸地震の基本的な発生過程であるという作業仮説が提案されています。この柔らかい領域の実体を明らかにすることが、発生予測の鍵となるものと考えられます。

「近畿の地盤特性と地震時の挙動」

三田村宗樹氏(大阪市立大学大学院理学系研究科 教授)

近畿地方は、多くの活断層が存在し、山地と低地が箱庭的に分布する地域です。大阪平野、京都盆地、奈良盆地、近江盆地は第四紀の地殻変動を受けて沈み込み、そこには未固結堆積層である第四紀層が厚く分布します。これらの第四紀層は地震波を増幅させ、その分布地域となる低地部に大きな地震動をもたらします。特に沖積低地表層を構成する沖積層はその傾向が強く、液状化被害の大きな要因ともなっています。さらに、都市域とその周辺には人工的な地盤が構築され、地震時の多様な被害を拡大させています。このような事例を示しながら、本講演では、近畿で共通する地盤特性と地震時の地盤に関わる災害について紹介します。

* 市民講演会の前後各 1 時間に会場エントランスホールにおいて「市民向けポスター展示説明会」を行います。

■ 参加費無料。どなたでもご参加いただけます。申込不要。

■ お問い合わせ:

email: ishii@p.s.osakafu-u.ac.jp 電話: 072-254-9729(石井和彦)

<http://www.osakafu-u.ac.jp/event/2012/20120916.html>